

T Y K

TOKAIDO YOTSUYA KWAIDAN

東海道四谷怪談

三幕目

第二稿

原作／鶴屋南北

脚本／小中千昭

Animation Play by Chiaki J. Konaka

2005\07\12

登場人物

鶴屋南北

民谷伊右衛門……………浪人

民谷お岩……………四谷左門の娘／伊右衛門の妻

四谷お袖……………お岩の義妹

伊藤お梅……………伊右衛門隣家の武家娘

佐藤与茂七……………お袖の許嫁

直助権兵衛……………かつて伊右衛門の家臣

宅悦……………按摩／地獄宿主

小仏小平……………伊右衛門家の奉公人

秋山長兵衛……………伊右衛門の浪人仲間

四谷左門……………お岩の父

伊藤喜兵衛……………お梅の父

お槓……………お梅の乳母

お熊……………伊右衛門の母

小仏次郎吉……………小平の幼い息子

古着屋の女

○イントロダクション／四谷・田宮神社於岩稲荷（実写）

現代の四谷。近代的なビルを背景に、小さな稲荷がひっそりと建っている。

南北「（モノ）『東海道四谷怪談』のお岩は、民谷家と伊藤家の双方共に、子孫が絶えるまで崇るとしていた。しかし、この四谷にある神社に、田宮家の子孫が今なお続いている——」

○田宮神社縁起（若しくは 岡本綺堂『江戸に就いての話』表紙

南北「（モノ）この神社に伝わる、お岩の伝承は、怪談噺では全くない。評判の良い働きものであった、田宮家の娘お岩が、日頃敬ったというのがこの邸内にあった小さな稲荷。精進者のお岩を見習って近隣の人が参る様になって今に続いている——」

——暗転

○幽霊画のお岩

南北「（モノ）実際に存在したとされるお岩は、夫に裏切られた挙げ句に鬼女となって崇ったお岩と、貞女の鑑とされたお岩——、どちらなのだろうか……。さておき。私の名は四世鶴屋南北。『東海道四谷怪談』の物語を続けよう——」

○メイン・タイトル「TYK」

○暗転／廃屋となっている伊藤屋敷

南北「（モノ）お岩の祟りによって、伊藤家は取り潰しとなった——」

○隠亡堀（おんぼうぼり／深川）／秋の夕刻

葦が繁る寂しい風景——。

鰻かきの格好をした直助が、竿で川の底をかき回している。と——、何かを見つけた。

直助「お？ 何だこいつは」

引き上げてみると——、それは鼈甲の櫛（お岩の櫛）だった。

直助「こいつはまんざらでもねえ代物だな」

懐に櫛を仕舞う直助。

と、向こうから二人の人影が近づいてくる。そっと身を屈めて様子を伺う直助。

やってきたのは、釣り竿を肩に、編笠を被った伊右衛門と、年配の女——伊右衛門の母お熊。お熊は卒塔婆を手にかけている。

伊右衛門「母殿、ご心配かけてすまない」

お熊「伊右衛門、お前は死んだ事にするのです。ほら、こうしてお前の卒塔婆を書いてきました」

『俗名民谷伊右衛門』と書かれた卒塔婆を立てる。

伊右衛門「——自分の卒塔婆を見るのは、いささか奇妙な気分」
にっ、とお齒黒の口で笑むお熊。

お熊「それでは達者で」

そそくさと去っていくお熊。

伊右衛門「……」

と——、草葉の蔭からぬっと顔を見せる直助。

直助「民谷の旦那」

伊右衛門「！——直助か。久しぶりだな」

直助「聞きました。大変な事しなすった様で」

伊右衛門「ふん……」

直助、しげしげと伊右衛門の卒塔婆に見入り

直助「なるほどあんたは、強悪だなア」

伊右衛門「——（呟き）首が飛んでも、動いて見せるわ……」

直助「？」

伊右衛門、小さく吐息を漏らし、遠くを見つめる。
南北「(モノ) 伊右衛門は、確かにお岩の父親を欲から殺し、奉公人の小平も殺した悪人には違いない。しかし、お岩に薬を盛ったのは伊藤家の喜兵衛とお梅であり、伊右衛門はただ成り行きに従っただけであった」

直助、「それじゃ手前は」と挨拶し、去っていく。
独り残った伊右衛門、釣り竿の糸を水に垂らす。

徐々に、空気が淀んでいく。

辺りも暗くなり、川のせせらぐ音、鴉の声が遠ざか
己の吐息が聞こえるまでに静まる気配。

と——、水音と共に、何かが岸に向かって流れついでくる。

伊右衛門「……」

それは——、戸板だ。

伊右衛門「！」

▼フラッシュ／戸板に打ちつけられるお岩と小平。

伊右衛門「——(呻く)」

その戸板は、伊右衛門のすぐ側に流れついてくる。
逡巡するも——、伊右衛門、屈み込んで戸板に手を
かけ——、勢いをつけ引っ繰り返す。

ザバッ！

伊右衛門「ぐはっ二」

戸板の裏側には、死蠟化したお岩の死骸。

お岩の声「(位相反転声／口は動かず) 民谷の血筋、伊藤の血筋
を絶やさん——」

伊右衛門「くっ、くそっ！」

伊右衛門、足で戸板を蹴り、流そうとする。

と！ 死骸のお岩が揺れて、後身を見せる。

伊右衛門「二」

お岩の後ろ側と融着し、シヤム双生児の様に小平の
ドロドロに溶けた死骸があり——、首を伊右衛門に
向ける。

伊右衛門「ひっ！——」

小平「(位相反転声) 薬を下さい——、伊右衛門様……」

伊右衛門、刀を振り回し、戸板を無茶苦茶に蹴りつけて流す。

伊右衛門「死霊のたたりがッ！ くそっ！ くそっ！ くそっ！ くそお
おお！」

隠亡堀に響き渡る伊右衛門の叫び。

溶暗

○深川三角屋敷／お袖と直助の家

深川、法乗院寺町。生け垣に卒塔婆が立ち並ぶ。

家の軒先でお袖が洗濯桶で洗濯をしている。

南北「(モノ) 一方、お岩の妹、お袖は、父親、更には許嫁の
与茂七までも殺され、今や仇討ちだけを生き甲斐に生きていた。与茂七を殺した下手人が直助とは知らず、仇討ちを手助けしようという直助の誘いに乗って、仮そめの夫婦となっていたが、哀れ、お袖は未だ姉・お岩の死を知らない——」

と、中年の女房(お齒黒)が丸めた着物を持ってやってくる。

お袖「あら、古着屋さん」

古着屋「お袖ちゃん、この着物もついでに洗濯して頂戴」

その着物を見て胸が騒ぐお袖。

お袖「——この着物はどうなさったんです？」

古着屋「(ニッ) いやね、戸板で流された土左衛門の着物さね」

お袖「えっ……、死人の着物……」

古着屋「冗談だって。あははは。じゃ頼んだよ」

行ってしまおう古着屋。

お袖「……」

お袖、着物を洗濯桶に入れる。

と、鰻かき姿の直助、帰ってくる。

お袖「おやお前様、お帰りなさいませ」

直助「帰りましたよ。おっとそうだ。お袖さん。こんなもんが

陰亡堀に流れてきやしてね。あんたに似合うんじゃないかと」

直助、鼈甲の櫛を懐から出して見せる。

お袖「二(愕然)——こっ、これはお岩姉様の櫛！」

直助「なっ、何だって……？」

お袖「はっきり見覚えがあります。私に譲って下さると見せてくれたのですから。」

○フラッシュバック／幸せな時

鷹狩りで遊ぶ四谷家の人々。

微笑み合う、お岩とお袖——。

お岩、自分の櫛を抜いてお袖に見せる。

嬉しそうな顔で見入るお袖——。

○直助とお袖の家

姉の面影を思い出しているお袖——。

直助「(つまらなそうに)なら貰っておきなさいな」

お袖「(被りを振り)実の姉妹ならともかく、私は義理の妹。

明日にでも四谷に届けにいきます」

言ってお袖、室内に入っていく。

残った直助、未だ持っている櫛を見て——

直助「ふん。一旦俺の手に入ったもんだ。誰がタダでくれてやるかよ」

櫛を手にしたまま行こうとする直助——、その足元に冷やりとした感触がして、びくっと足元を見る。

直助「ひっ二」

直助の足を、死蠟の様な細い濡れた手が掴んでいた。

直助「あうっ、うっ二」

その手の主はと振り向くと、その腕は洗濯桶から異様な長さで伸びていた。関節の無い、奇怪な腕。

直助「ひいひいっ」

尻餅をつく直助。

奥から出てくるお袖。

お袖「どうしました」

はっとなる直助。腕など自分の足を握ってはいない。

直助「——（狼狽）な、何でもねえ……」

お袖「……？」

お袖、洗濯桶に漬かっている着物を洗い始める。

と、塀の外から按摩の声が聞こえる。

直助「お、丁度いいや。おーい按摩さんよ。こっち入っておくれよ」

徐々に、桶の水が赤く染まっていくのに気づくお袖。笛の音止み、ややして入ってくるのは宅悦。

宅悦「はい御免なさいよ——（直助見て）あっ」

直助「なんだい、あんた浅草にいた宅悦か。久しぶりだなあ」
怯えたお袖、ゆっくりと着物を桶から上げる。

内側から激しく滲み出している、血。

お袖「こっ、この着物——」

宅悦、桶を覗こうとし——、ふと直助が持っていた櫛に目を留める。

宅悦「！ この櫛は四谷のお岩様の……」

お袖「えっ、姉上を御存知なのですか」

宅悦「御存知も何も……。あの陰惨な現場、あたしも見やしたからねえ」

お袖「陰惨……（既に予感）」

直助「お袖の姉様に、いってえ何が起こったんだ」

宅悦「それは……」

込み入った話を始める宅悦。

聞いているお袖の顔、次第に強張っていき——

○前話リプライズ

宅悦「あの……、お岩様……？」

顔をゆっくりと上げるお岩。

喜兵衛「あの薬、命までは奪いませぬが、一口飲めば顔が崩れる

お袖、宅悦の胸ぐらを掴み

お袖「伊右衛門は何処にいるのです。姉の仇を討たねばなりません！ 伊右衛門は何処に！」

宅悦「(狼狽)い、い、いやあたくしは全く存じませぬ。お話はこれまで。では御免下さいまし」

そそくさと出て行ってしまふ宅悦。

お袖は怒りと悲しみに身を震わせている。

その姿の美しさに、邪な欲望を滾らす直助。

直助「伊右衛門も、あなたたちの親父様の仇を討つと聞いてましたな。お岩様が亡くなった今、仇を討てるのはお袖さん、あなただけになった」

お袖「——手伝ってはくれないのですか」

直助「(うそぶき)仮初めの夫婦ですからねえ。本当の夫婦に結ばれていれば、あなたの敵は俺の敵」

お袖「本当の夫婦になれば——、敵討ちを手伝ってくれるのですね」

直助「寢床を共にする、本当の夫婦ならば」

お袖「(涙をぼろぼろと零し)——では今宵から……」

直助「(にんまり)そうかい、そうかい……。おいで、お袖」

直助、お袖の手を引き、室内へ。

俯き従っていくお袖。

閉じられる障子。

直助「(オフ)——やっと、あなたの膚に触れられる。この日をどれだけ待っていたか」

啜り泣くお袖の声が漏れてくる。

○寺町／仏孫兵衛宅

裏庭で、お熊が子どもを足蹴に苛めている。

お熊「なんでこれしか蜆を売って来ないんだい！」

次郎吉「ごめんよ、ごめんよ」

南北「(モノ)伊右衛門の母、お熊は赤穂家断絶となると、抜目無く敵方の吉良家に奉公し、今は仏孫兵衛、即ち小仏

軒先に、お袖が洗濯した小平の服が干されている。
その服に、鬼火がついて青白い炎に包む。

与茂七「！」

その青く燃え上がる服に、何匹もの蛇がまとわりつ
いている様に見える。

与茂七「——この家は何だ……？」

家に入っていく与茂七。

○同／軒先

入ってくる与茂七。

与茂七「御免。もし御免！」

奥から衣擦れの音。

与茂七「誰かおらぬか。御免」

と——、逞しい上半身を露にした直助が出てくる。

直助「うるせえな、誰だ——」

直助、与茂七の顔を見て蒼白になる。

直助「なっ……、ゆっ、ゆっ、幽霊！」

与茂七「お前は直助——。ここは……」

と——、奥から裾を直しながら出てくるお袖。

お袖「聞き覚えのあるそのお声……。よもや、よもや……」

与茂七「！ お、お袖さん！」

お袖、与茂七を見て愕然となり、腰を崩す。

お袖「与茂七様……、生きて、生きておられたんですね……」

与茂七「ああ。幽霊などではない」

直助「あ、あんたは浅草の裏田圃で辻斬りに遇った筈……」

与茂七「（合点）そうだったか。いや、あの晩、私は赤穂に内密
の文書を届ける為、奥田庄三郎という者と着物を取り替
えていたのだ。庄三郎の行方が知れぬと聞いて案じてい
たが——」

直助「な……」

○フラッシュバック

暗い浅草裏田圃で、背後から小間物屋姿の男を刺す直助。

顔の皮を剥ぎとる、悪魔の形相の直助――。

○軒先

直助「……（眩き）そうだったかよ……」

与茂七「それにしても、何故お袖さんと直助がここにいるのだ」

お袖「（顔を伏せて忍び泣く）」

直助「――（強気を蘇らせ）色々あってな。今はこの直助とお袖は、本当の夫婦になってるんだよ」

与茂七「なっ、何？ そんな莫迦な！ お袖さん、嘘だろう！」

お袖「――本当でございます……」

与茂七「我々は未だ離縁してないのだぞ！」

直助「もう遅いんですよ。お袖さんに未練を残さず、この俺に下さいよ。貰いましたよ」

お袖、泣くのを止めじっと俯き一点を見つめている。
与茂七「女をくれとはなかなか男らしいが、そうはいかない。以前の様に私が武士の身分なら、貴様を斬るところ」

直助「お袖と俺には、夫婦となってしなくてはならない約束があるんです。なあお袖」

お袖「……」

与茂七「お袖さん。そなたは私とこの直助、どちらを選ぶのだ」

お袖「……」

直助「おうよ、お袖。どっちを選ぶんだい」

じっと硬い顔をしていたお袖――、顔を上げて無表情に告げる。

お袖「なに分にも、わたくしに全てお任せ下さい」

直助と与茂七、お袖の意図を探る様に見つめる。

と、お袖、立ち上がって

お袖「与茂七様、ちょっと奥に来て下さいまし。お話がありますので」

与茂七、お袖に従って奥に向かう。

残された直助——、

直助「——きしょう。もう一度あいつを殺してやる……」

○法乗院寺町

日が暮れ、静まる門前町。

○直助とお袖の家／台所

みしり、みしりと音をたて、忍び入る直助。

台所から出刃包丁を手にし、奥の部屋に進んでいく。
みしり——、みしり——。

包丁の柄を持つ手が強く握られ——

と、すっと脇の障子が開いて、忍び出てくるお袖。

お袖「(包丁を見ても慌てず／囁き声) まあまあ、ちょっとお待ちなさいな」

直助「手前、未だ与茂七を庇い立てする気だな」

お袖「何を仰るの。あなたと私は真の夫婦。伊右衛門を討つまでは決してあなたと離れません」

直助「——(怪訝) じゃあ……?」

お袖、包丁を持つ直助の手に触れる。

お袖「——(艶容に囁き) あの方が生きていては、私にも都合。生きていられては困るのです……」

直助「——(ニツ) そんなら、お前さんが与茂七に酒を飲ませて酔ったところを——」

お袖「行灯を消したら、それを合図に屏風の蔭から忍び寄って」

直助「一突きに……」

見つめ合う二人——。

○奥の部屋

戻ってくるお袖。

部屋には、入り口側と奥側双方に屏風が置かれ、片隅に行灯が灯っている。

与茂七「——直助は」

お袖「遅くまで出かけました」

与茂七「そうか。（刀に手をかけ）戻ったなら……」

お袖「与茂七様、直助を侮ってはなりません。私が酒を飲ませ
て酔わせます」

与茂七「ふむ……」

お袖「行灯の明かりを消したら、それを合図に、屏風の蔭から」
与茂七「たった一突きで直助を——。承知した」

与茂七、出て行く。

残ったお袖——、決意の顔。

おもむろに硯と紙を用意し、何事か書き付け始める。

○門前町

夜が更けていく——。

野良犬が方々で遠吠えしている。

○台所の片隅

出刃包丁手に、目をぎらぎらとさせて待つ直助。

○仏間

小太刀を構え、じっと息を潜めている与茂七。

○奥の部屋

ふっ、と行灯の火が吹き消された。

静まる気配——。

と、双方の屏風に黒い人影が浮かぶ。

与茂七+直助「（気合の声）」

お袖「あああつつつつぐぐ」

行灯を灯す与茂七——、愕然。

直助「二 おっ、お袖！ お袖二」

胸と腹、双方を刃に貫かれたお袖が、既にぐったりとなり、息を絶えようとしていた。

与茂七「（泣きそうに）どうして！ どうしてこんな事に二」

お袖「——（譫言）申し訳……ありませんでした……、与茂七様……」

呆然と立ち尽くす直助を、お袖見上げ——、手にしたお守り袋を渡そうとする。

お袖「直助さん、約束を——、果たして……。きっと伊右衛門を……」

お袖、絶命する。

与茂七「お袖さん！ お袖さああん二」

泣き崩れる与茂七——。

お袖から渡されたお守りを握りしめ、自失の直助。

直助「ねえよ……。こんな話、ねえよ……」

お守り袋、やけに厚みがある。

直助、中を開き、折り畳まれた紙を開く。

中には臍の緒が挟まれていた。

じつとその文書を読む直助。

与茂七は、お袖の亡骸を抱き、むせび泣いている。

と——、おもむろに直助、お袖の腹に刺さった包丁を抜きだす。

与茂七「三 直助！」

直助、血まみれの出刃包丁を、開いた己の腹に深く差し入れる。

与茂七「なっ——」

直助「——お、俺は本当の犬畜生だった……。庄三郎を殺したのはこの俺よ。小間物屋姿のお前と間違えたのさ……」

与茂七「！——」

直助「しかしそんな事はどうだっていい（苦笑）。このお袖の臍の緒書きを読んで判った——。お袖の本当の親は元宮

三太夫……。俺の親だよ」

与茂七「！——という事は……」

直助「(悲しい目でお袖の顔を見て)——俺とお袖は、生き別れた実の兄と妹……。なんで身分違いの俺が、このお袖に惚れ続けてきたのか、その訳がやっと判ったぜ……」

□から血を吐きながら、崩れる直助。

直助「よ、もしちさんよ……。俺の代わりに……。民谷伊右衛門を……。このお袖の為に……」

絶命する直助。

お袖と直助の亡骸。互いが流す血が交わっていく。

ゆらりと立ち上がる与茂七——。

与茂七「(悲痛に叫び)——」

南北「(モノ)お岩の妹、お袖を巡る、あまりにも恐ろしい因縁を、お袖は自らの命と引き換えに絶ったのである。宿命とは抗えないものなのだろうか……。だが、ここに未だ、己の宿命に抗い続ける男がいる——」

○すすきの原／晩秋／夜

冷え冷えとした風が強く吹き、枯れすすきが波をたてている。

そこを歩く——、伊右衛門。

やつれきり、幽鬼の様な顔。

南北「(モノ)お岩の祟りは未だ終わらない。伊右衛門を待ち受ける、語るもおぞましい宿命——。この続きは、次の幕にて——」

三幕目 了